方向　第十九号　一九八二年八月三日発行　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

わたしの兵隊手帳（二）

赤谷明海

〈※昭和十九年〉八月七日晴

※漢口兵站宿舎にて〈六月三十日から七月九日まで滞在〉

漢口兵站第三通過部隊宿舎。これが自分等の宿泊所であつた。アパートの様でもあり、長屋の様でもあり、部屋部屋が夫々連絡してをり、結局何に使つてゐたかはつきりしない。この建物は相当古く、着いたその日にも一部が崩壊するといつた始末。野戦的な気分がなければとても住めた所ではない。自分等の分隊は中二階の一室にムシロを敷いて、狭苦しいながらに各自の位置を決め、ただ一箇の窓を頼りに涼を求め、夜はものすごい蚊と暑さとに安眠も出来なかつた。然しこれにまして閉口したのは食事である。お菜のまづいのは辛抱出来るとしても飯米が食へなかつた。大げさへ※原漢字〉な様だが、飯の中の三分の一は籾と砂である。幸に飯がサバサバしてゐる時は汁をかけて籾を選り、砂を沈めて食ふ事が出来るが、何時だつたか、武昌に弾薬受領に行つて空腹でかへつて来た時など、全く一口も食へない程砂が多くてどうにもならない事さへあつた。〈支給米を横流しして鶏のエサを食わすのさとは兵隊間のうわさ〉分隊員の中尾等の活躍で、炊事〈場〉から上等の飯或は米を貰つて来た

たり、へどんな策を用いたものか〉飯を洗つてお粥にしたりする事が出来たればこそ、たまには舌鼓を打てたものの、さもなければたまつたものではなかつた。

自分等の部屋はすぐ上は屋上になつてをり、夕方から夜にかけてよく涼みに行つてはそこからの眺めを楽しみ、はては想へい〉を故郷に馳せる事が多かつた。すぐ前へ方〉は一寸した草原を隔てて豊田自動車工場の古びた建物があり、その建物やへ兵站〉宿舎の建物が、一様に南は道路北はクリークへ水路、堀割〉で切れてゐる。南の方の道路の向ふに大きい池があつて白蓮が咲き、北の方はクリークの向岸が高い堤になつて視界をかぎつてゐるが、中山公園等に続くとかの話であつた。夕方屋上に坐つては眼をクリークの方にやることが多かつた。広い水幅の大部を占めて雲が映つてゐる。そしてその小部は暗く堤の影を沈め、堤上を通るものが淡々とへした〉影を雲の部分に落す。十二、三の女の子が走つて行く。その後からあぶなげな足どりで四、五才の男の子が走る。更に後から一匹の犬がキョロキョロしながら続いてゆく。やがて先頭の者が止つてふり向きながら、子供の近よるのを待つてゐる。もう追付く一歩手前で女の子は又走り出す。かかる姿が影と共に眼前から消え去つた後にも、故郷の子供のしぐさが連想となつて残され、それは又やがて故郷のくさぐさの事柄に延びて行く。今から思つても、この漢口での幾夕は相当感傷的な気持で満されてゐたものである。

○八　月　八　日　晴

※漢口より岳州へ

一週間余り漢口の兵站宿舎に対〈待〉機してゐたが、その終りに近い頃、上等兵殿がさかんに外出し、その都度

支那酒が持帰られへたゝ、六日の事だつたが初めてそれを口にした。少しも美味（うま）くない。強烈に口中を刺戟するだけである。これを大して飲みもしなかつたのに、翌朝珍らしく下痢をした。早速食を節し、七日も支那酒があつたが飲まずにゐたところ、すぐ回復してしまつた。次の八日の事である。明朝は愈々（いよいよ）出発と決つた。坂田上等兵殿がチャンチュウへ中国酒。焼酎かゝ二本買つて来られて、さあ飲めと言ふ。他に谷田の従兄が持つて来た日本酒・ビールも幾分かある。然し誰も相手にならうとする者がない。此方も余り飲みたくない。然し上等兵に対する義理として、昨夜ことはつた手前もあるので、辞する訳にもゆかず、最後まで御相手を勤めた。そして相当酔つた。酔つてから中尾が炊いてくれた良米の粥をうまく食つた。その結果夜中に下痢を催し、同時に嘔吐をさへしてしまつた。それでもなかなか酔は醒めない。眠れぬままに月下に水浴等をしてゐるうちに、午前三時半起床命令が出た。食事は勿論一箸（はし）もつけず、何をするにも未だ酔余の不快の中での事だつた。六時へに〉宿舎を出、碼頭へまとう・波止場〉から対岸の武昌に移つた頃はすつかり元気をとり戻し、腹の方も下痢が癒つた様だつた。武昌市中を無駄なへに〉行軍しながらぐるぐる廻り、或地点で指揮者の交代があり、今までの輸送指揮官田淵中尉殿・滝野見士へ見習士官〉・田尾班長殿等には別れてしまつた。そこから更に約二里を隔てた武昌駅に向つたが、途中エッ病へ日射病〉の一歩手前までゆき、辛うじて駅近傍の小丘の麓までたどり着いた。夕食にカンメンポウへかんぱん〉をかぢりながら殆どもと通りに元気を回復し、相当離れたところまで湯茶を貰ひにさへ行つた程である。然し支那酒以来腹は無理をしてゐる。武昌でこれといつて水を飲んだ様な記憶はないが、その夕方武昌を発ち、翌十日へのゝ夕方趙季へ李カゝ橋へ※汀泗橋？〉に立往生しへ列車のストップゝ、飯盒炊サン

を始めた時、本格的な下痢便を排泄した。その夜車外の材木の上で寝たのが更に悪い影響を与へたと見え、朝までに六、七回便に立つた。翌十一日午後岳州駅に着き、空爆を避けて近くの草原に休憩したが、この時初めて血便を混じてゐるのに〈便に血がまじっているのに〉気がついた。岳州より更に五里ハイ〈牌〉に進み、そこで宿営を続け、遂に入院・後送となつた訳だが、その間〈一時は〉便は大分良くなつた様に見えた。然し無知なため、水浴〈クリークでの水泳〉を長い間楽しみ、腹を冷したのが病勢を逆転さす様になつてしまつた。

これまで、自分等は血便について何等恐れも有たなかつた。谷田は船中で血便しながら良くなつた。ところが検診の時、血便と言つただけで直に入院の手続がとられたのは意外がつた。〈入院は予想外。これで戦友意識の生れかけていた連中と別れてしまつた。

○八　月　九　日　　曇　　〈一転して岡本和気さんへの追憶となる〉

和気さんを憶ふ

和気さん　今日はあなたの祥月命日　ぐつと込みあげてくる　いろいろの思ひを　ただ私の胸だけに秘めかねて　お宅の兄さんに　淋しい吐息を書き伝へました　そしてその中に　無言の読経に冥福を祈ると言ひました　然し実のところ　あなたの冥福を祈るといふのがどんな事か　私にもはつきりわかりません

あなたの霊といふのがどんなのか　死後の事に関して私は全く何も確かなことは言へません　ただ私が眼を瞑るとき　見たことのない或場所が映つて来　そこには清冽な水と　角ばつた巨岩と　岸辺の雑草と　それに続く畑のキビ〈※原漢字〉の穂が見え　それらが悲しみのウェールにつつまれて　ぢつと静まつてゐます　然もそこに

はあなたはゐない　そこにはどんな姿に於けるあなたもゐない　ただあなたの姿は　場所を転換して　あの応量坊の庭先に　日傘と風呂敷を持つてゐたり　宇陀の山寺の火鉢に　つつましく手をかざしてゐたり　育英の寄宿舎に　弁当箱を開いてゐたり　その様な姿しか　私には見えないのです　そして私の頭の奥に映るものとしては　ただ斯様な情況だけなのです　而もその情況はすべて悲しみに閉されてゐます　私はそれを見ながら　ぐつと胸に押しつめてくるその悲しみを　静かに全身の血液にしみこませてゐます　この悲しみこそ　あなたそのものである様に

○八　月　十　一　日　　曇　小雨

※武昌駅近傍

ものすごい炎熱の中を、辛うじて武昌駅の近くまでたどりついたのが七月九日の正午の事。駅の近くに小高い丘があり、支那には珍らしく相当な巨木が麓にどうにか憩へる影を作つてゐた。へそれまでの途次、大きい木は見られなかった〉ごく近くに馬の死体か何か埋めてあるのが風と共に鼻もちならぬ異臭を送つてくるのには閉口したが、この樹影のお蔭で半日の行軍にすつかりうだつてゐたへへばっていた〉身体も、夕方までに元気をとり戻すことができた。三時頃の事。昼食の残りを粥にしようと上の方へ登つて行つたところ、まだ荒廃とまではゆかない望楼の様なものがあるへあつた〉。丁度奈良へ公園〉の丸窓を支那建築に変へた様な家。飯盒のたぎるまでの暇に、更に丘の上の頂に登り、武昌市街の眺望もすてがたく見もしたが、この望楼に残された落書が最も印象強かつた。どうにか意味はとれる支那人へ人〉の恋愛詩も面白かつたが、鉛筆の走り書きながらすばらしい達

筆で「日本無名兵士」と誌し、七夕即ち丁度二日前にそれを書いた事を示す和歌一首を読んだときにはうれしかつた。当時暗誦してゐたものの今忘れてしまつたのが残念だが、決して初心者の作とも見えず、たつた二日の相違でその作者に会へなかつたのも残念であつた。

○八　月　十　四　日　　曇　小雨

※岳州野戦病院　〈七月十四日入院。「入院すれば看護婦さんがいていいな」と部隊の者が羨しそうに見送つていた。〉

ここでの想出は極めて悪い。今想ひ出してもぞつとする。特にあの伝〈染〉病棟で過した数日はとても普通の良識を以てしては理解できない。といふのは人間の住む病室ではない。爆撃を受けて半分天井のない部屋。その下にゴロゴロとコロがつてゐる真黒けな患者、床(ゆか)も蒲団も下痢便だらけ、病棟中にただよふ臭気(におい)、暑気。「衛生兵殿！」と半死の病人が救ひを求める声、変な臭のする食器と粥、それに毎日変つたことのない味噌汁、湯茶は制限され而も飯上げにはゆかねばならぬ病人、実際ここの病人はあはれである。更に軍医は皆病気になつたとかで、手不足のため回診はなく、〈見習士官の軍医？〉が一人いて、動けぬ患者を足でころがしていたのを見た。〈衛生兵の手は少く、助かるべき人間の生命が可惜空(あたら)しく消えてゆく。これは内科〈内科は伝染病棟と道を隔てて向い側にあつたように思う〉に転送されへてからのことであるが〈門前に二日も三日も晒されたままでやがて息絶え、毎日一〈※十〉把一からげにして屍体の山に放り積まれてゆくのを見た時に最も痛切に感じたのであるが、伝病〈棟〉でも日に三人や四人の死なない時とてなかつた。粥が食へずへのどを通らず〉、ただ湯茶を求めて、

深夜に水の在所を尋ねて這ひ出し、やがて野天に腹を冷しながら死の眠りに落ちるものもあつた。これらももとをへはと〻言へば単なる下痢、家族の看護でも受ければ殆ど全部が助かる生命である。勿論、野戦の事だから諸事整はないのは当然ながら、病死する生命も一箇の生命。共に大事な国家の宝である。かうむざむざと捨てられる生命を見れば、もつと改善すべき必要が感じられ、而もその余地の多々あるのを知らされるのである。〈これが戦争の実態だとの認識なし。〉

この伝染病棟にゐたのが六日間。入つた日などは三十九度四分の熱があり、マラリヤではないかと疑はれた程。今から思へば五里ハイから歩いて来た事、飯上げに遠方まで歩いて行つた事等の身体的な理由もあつたらうが、病院の雰囲気に刺戟されての理由が最も大きかつたのではないかと思ふ。熱が下つてからは、涼を求めるのと臭気からのがれるのとで、暇さへあれば楠の木蔭にボツ然へぼう然か。唯一人か。〉と腰を据ゑてゐた。そして是が非でもこの病棟から逃げ出さなくては命がないと思ひ込み、その確信はなかなか鞏固なものであつた。幸にして一週間程で内科病棟へ移され、相変らずの湿気・臭気・蚊・蠅、給養の悪さ等になやまされはしたものの、気分的には救はれた様なものだつた。そしてここから更に武昌に後送される四、五日前から食慾が漸次芽ばえて来、身体に対する自信が再びたかまつて来た。

夜来庵かぜだより　―若い日の森田曠平―　（二）　原田憲雄編

一九三六（昭和十一）年一月四日　封筒日付は五日、六日午前消印、手紙。

原田憲次郎兄、　一月四日

此の間うち、或は君が来て呉れるかも知れないと思つて待つてゐた。がしかしたう、、顔を見る機会がなかつた。もうこれ以上は八日に学校で会ふより、てはない。これから少し人と会つたりする仕事があるのだ。まず三日間は少々不規則な生活をして、四日は休んで、五日から活動する。その活動たるや、その時になつてみなければ分らないのだが、兎も角今はするつもりなのだから。六日は人と会ふ。君にも話したつもりだが、沢田宗山氏とだ。もう大抵陶器の方へ行くつもりだ。いくら自分が油絵の方をやりたくても周囲が（ことに僕の周囲はうるさ方が多いのだ。例へば祖父へ京都市長だった森田茂氏〉があんな政治家なんかやつてゐた関係上、主だつたコブンなんかがゐてそれが陶器の方へ進めるのだから。又、その言ふ通りにすれば或る程度まで自分にとつては有利な所もある。）それに讃成しない。それで或程度の妥協も必要になつて来る。又、陶器の方をやつても今迄よりはずつと絵も描けるのだからい、訣だ。ただ展覧会へ発表出来ないのが嫌だがね。それで陶工の仕事が不適だと思つたら又油絵の方へ戻るのもあながち恥でもあるまい。

その今言つた意見には大分伊谷さんの考へもまじつてゐる。伊谷さんも現在の僕の立場を理解して呉れてゐるから　その点は楽なのだ。そして、又白堊会へも招待して呉れたのだが転向するとすると少々遠慮したい様な気にもなる。

手紙を書いたついでに　先日来作つた短歌を少々紹介しようか。余技にやるといふ事は　それだけ責任がない訣

だから　楽につくれるし、又　下手でも恥とは思はない。その点　都合がいゝ。

○髪をすく　めのこの　ほゝの　うすあかき　みれば　なつかし　冬の夜のこと。

十二月三十一日

○今年はや、　今日一日と　なりにけり　のどけくありて　さびしきこゝろ。

○蒼穹を　おほへる雲の　むらむらと　ひろごり湧きて　木枯も吹く。

元日雑詠

何がなく　満ちたりおれる　心もて　今日のこの日を　ひとり坐るも。

あたゝかき　光こもれる　元日の　部屋のどけくて　坐る吾かも。

あたゝかき　しじまに向ひ　ひとりをれば　陽はのどかにて　昼たけにける。

たまゆらも　やすらはぬこゝろ　今日のみは　気もはろばろと　ひとり坐れる。

雑詠

坐りをり　文机にさす　冬の陽の　影あたゝかき　このひねもす。

こゝろも軽き　日なりけり　ひとり坐れる　南むく部屋。

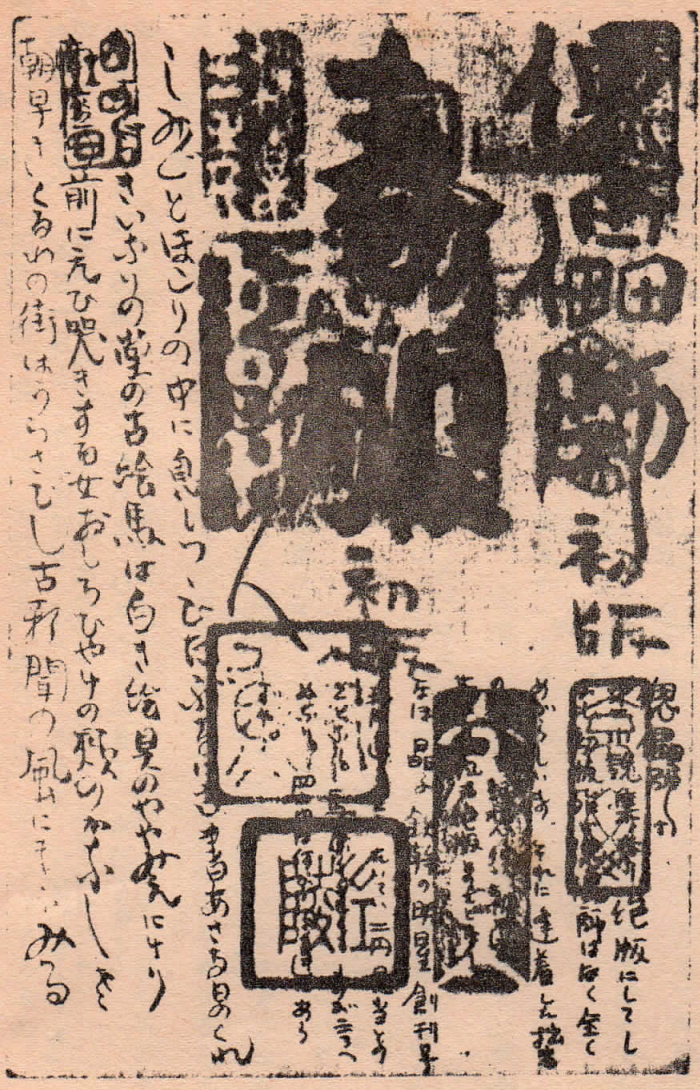
みかんをむきぬ　冬の日の　南の部屋に　かほる山の香。

以上の如くであります。

暇があつたら　批評してくれ給へ。そして直して呉れたら　幸甚。

昨四日から書き始めたが　此の行を書いてゐるのは五日。ではさよなら　　曠平

二月十六日　午後消印。はがき二通。このはがきから「憲雄」あてになっている。



傀儡師は　〈芥川竜之介の〉第二小説集なり、絶版にしてしかも初版、殆ど傀儡師はなく全くめづらしいもの、それに逢着した拙者の歓喜御想像被下度候、黄雀風も絶版とのことなり。

なほ　晶子　鉄幹の明星創刊号　五円迄とのこと、たいてい二円見当とのことなり。四十円は何かの間違にあらずや。

しみじみとほこりの中に息しつ、ひたぶるに古書あさる日のくれ　うすぐらきいなりの堂の古絵馬は白き絵具のややみえにけり　南座の前にえひ哭きする女おしろひやけの頬のかなしさ　朝早きくるわの街はうらさびし古新聞の風にまふみる

〈前頁のはがきの「傀儡師初版」「春服初版」は鉛筆。記事は青インキ。短歌の第一首、赤、第二首、藍、第三首、朱、第四首、緑の絵の具で書いてある。また、この頁のはがきは、表書き墨書。絵は淡彩の墨絵。表の署名は「平山人」〉

二月二十七日　午後消印、はがき。住所は、「一乗寺水干町二五西村方」に変っている。

先日は失敬した。

扨　前に君がへ北原〉白秋の桐の花へ歌集〉云々と言つてゐたが、それを君は発見してゐるの？もしさうだつたら　僕の方へまはして呉れない？価によつては買はうと思つてゐる。大正二年発行、価一、〇〇のものだよ。すまないが一筆しらして呉れ給へ。おたのみします。昨日　明治四十年発行の晶子の黒髪を買つた。今迄で一番価値のある本。君が来たら自慢をしようと思つて待つてゐる。さよなら。

二　月　二　十　九　日　　付、午後消印、手紙。「京都府愛宕郡修学院村一乗寺小字水干二五　西村安次郎」と印刷した封筒の「西村安次郎」を消して「森田曠平」と署名する。

お手紙ありがたう。

「桐の花」　あれは僕の思つてゐたのは大正二年発行の奴なのだ。新しいのは慾へママ〉しくない。

青年将校の暴挙へ二・二六事件〉は君と全く同意見だ。僕の言ひたい事を君が全部言つてゐる。しかし彼等に使はれた兵卒こそいへい〉迷惑だね。芥川竜氏曰く。理想的兵卒は絶対無責任なる人だ。は彼等にあてはまる。首脳者はよろしく極刑に処すべきだよ。全部殺してしまつたらい、。唯兵卒が可哀さうだがね。僕は元来死刑絶対反対者なのだが　今度こそ死刑といふものがあつてよいといふ事が分つた。

黒髪ね。あれは一円五〇銭で買つた。定価は五〇銭なのだ。相当上つてゐるね。

大塚氏もあれはほしがつて本へ古書目録のことか〉に〇がつけてあるのだよ。本屋も自慢してゐた。ただ主人がゐなくておかみさんだつたがね。彼女の話しによると　本当か嘘か分らないが　二円程の相場（？）のものださ

うだ。以前にそれだけで取引せられたさうだよ。それを少しきたないので遠慮して一円五〇銭にしたのだとの事だつた。あれを発見した晩はねられなかつた。その翌朝とんで行つて買つた。朝だとの理由で十銭だけまけて呉れた。白秋の第二歌集雲母集を一円四〇銭で買つた。大正四年発行だ。い、歌がある。近頃のちよいちよい読むのより　僕は飾りけがなくてすきだよ。初版だ。（黒髪も初版だよ。）

額縁ね。あれ本来なら　ただで上げてもい、のだ。しかし今、絵と本との方で随分金がいる。本だけならそれ程のことはないのだが　絵具代が本の何倍もか、るのでね。早い話しが少し大きいものを描かうと思ふとキャンヴスだけで四円位はすつとんでしまふ。そしてその絵にホワイトだけでも二本はつかふ。一本八十五銭としてその二倍だ。それに他の絵具は平均して前者より高い。相当なものなのだ。そして今他のことで少し金がいるので今のところ実は自分の金は一文もないのだ。だから　もしあの額縁がほしいなら実費でい、。多分二円七十銭か八十銭か程出した様だがや、こしいから二円五〇銭でい、。これは決して高くない。僕は特別に安くしてもらつてゐるので　他の店で普通に買へば三円以上はする品物なのだから　僕の言　信用ありたし。

浴衣を着た女の像はあの縁には入らない。あの少女の絵は大してよくないが　やつがれの　だから大切にしてやつて呉れるのならやらう。（但し　嫁にやるのではないよ。）あの縁にあてはまるもので四年程前に描いた渓流の絵がある。これは僕の非常に愛着のある絵なので君に何時かあげるから大切に持つてゐて呉れ給へ。

今度　君に金を出させるのは僕としても非常に心苦しいのだが以上の様なわけでかんべんし給へ。

そのかはり　少しうまくなつたら陶器を何かこしらへてうめあはせをする。

はてしなき　薄が原の　みちのべの　みてらのいらか　夕暮れにけり。

某家の一室に移る　（二首）

うつり来て　此の部屋うれし　しんしんと　お湯はたぎりて　たたみあたらし

窓の外のしはぶき声も　うらさびし　今日氷雨降り　ひとの　こひしき。

春の遊び　一首

落ち椿の　べにの花びら　ひろひつつ　糸につなぎて　童女あそべり。

ガラス戸は　夜ぎりに　ぬれて　常夜灯の　ほのかにともる　春の宵かな。

うすれ日の　空はしたたる　蓬生の　野辺にくだれる　すずめひとむら。

くもり日や　小まどに近き　京の山　きりのはれまに　みてらある見ゆ。

いとけなき　頃の思ひは　教会の　ぴえたの御像　かなしかりけり

憲雄猊下　玉案下　　乞批評　　ライク紙魚生

〈一三頁一二行の「やつがれの」の下は手紙の原文のコピーである。なお、わたしの手許にあるかれの油絵は、静物一点と、温室の植物を描いた一点だけで、この手紙に見えるものはない。〉

三　月　二　日　　午後消印、はがき。

昨日君が尋ねて来て呉れたさうで何ともお詫びのし様がない。君の前の手紙で当分は来れさうにない様に書いてあつたので安心して外出したのだ。本当にすまなかつた。そのうち僕もお邪魔させてもらふかも知れない。

お金ありがたう。確かに受けとつた。

何か　作品はないかい。あつたら是非知らしてもらひたい。今日　僕も作品送らうと思つたが駄作なので遠慮する。もう書く事がなささうだ。ではさよなら。右御詫び迄。不一

三　月　三　日　　夕刻付、消印、手紙。

お手紙拝見した。僕の手紙　通知簿と一緒にまひ込んだのは色けしだね。君の手紙は今日、はからずもあのモデルのメイチェンの手紙と一緒にまひ込んだ。

君の歌拝見した。僕の不遠慮な感想の中から　何か　君が得るところあれば幸。

今度の事件に取材した聯作には君の思想が自由にあらはされてゐると思ふ。ただ少し　漢学趣味に流れすぎてはゐないか？

「大君のみ軍：：」の歌と「大君にそむきし人の：：」のはすきだ。が、少しかたすぎはしないだらうか。それ以上の細へこまかゝい技巧（絵ではこういふのだが歌では何へどゝういふのだらう）は僕は言へない。それは君の気分が充分表現されてゐるのに　それをつゝくと　何だかそれを全然破壊してしまひさうなのだ。「日本精神は：：」は漢文の様だ。すらすらつと思ふままに感じるままに作つてあるのはすきだがもう少しやはらかくならないか。例へば題材が全然異つてゐるが　へ島木ゝ赤彦の「雪隠に豈はからんや吾がこども乃木大将の歌をうたへり」等はもつとも研究する価値のある作品だと思ふ。前に述べた様な理由から。

「空しく春の夜：：」は実感がない様だが：：。ものうくも等の主観を入れずそのまゝの景色を言ひ放つては何

う？　さうしたらぐつと迫るものがあるだらう。

「火桶まだ……」は今度のの中で一番すきなうた。完成した点から言へば「大君にそむきし……」が一番だらう。この歌には敬服する。「最後の「ふりつみし……」は何となく作つた歌の感じがする。つまり　無理に悲しんでゐる様な感じがする（悲しむにも色々あるが……）

人の歌をくさしてから自分の拙作をひつぱり出すのは気がひけるが少し書いてみよう。ほめてばかりゐずに　うんとくさして下さい。お互に修行中なのだから。

昼深くまろねに寒き春の雪　やつでにここだ降りにけるかも。

夜をこめて　雪の降り降る　水干（みづぼし）の　場末の街は　わが居るところ。

洛東の　水干町や　友禅の　布さらす家は　わが居るところ。

春の夜に　窓の障子の　やれまより　雪みる部屋は　わが居るところ。

六畳の　部屋に机と火鉢とが　二つならぶは　わが居るところ。

詩仙堂を経て狸谷に至る。

老松のねもとにありて　さゝやかに　雪をかぶりて　朽へちゝし詩仙堂。

松山の　みだれたる秀へほゝの　いただきに　向山へむかやまゝの尾根　なだらなりけり。

みちのべの　地蔵ぼさつの　みあかしは　ゆらゆらもえて　春の日はてる。

狸谷の　赤松林の　あづまやは　うらさびしもよ　かけすなきをる。

春づきし　狸谷路　朝ゆけば　かけすのなくを　聞けるかも。　今。

松かさの　ほとりと落ちし　篁へたかむらゝの　斜面をみだす　初春のかぜ。

阻路へそばみちゝを越えさり行けば　かけすなきて　松の裏葉に　朝日通りぬ。

深き々々　阻路をゆけば　片がわの　山に著へいちじるゝく　雪は残れり。

阻路に　雪はのこれど　はるかなる　八重山の青　春づきにけり。

狸谷の　岩屋の奥に　たちたまふ　不動明王　眼へまなこゝらんらん。

岩穴の　ともしをあびて　明王の　怒りたまへる　姿たふとし

蕪村の　墓のあるてふ　金福寺へこんぷくじゝ　さがせど見えず　つかれはてけり。

憲雄大人玉案下　　曠平山人

南　歌　子　―李清照（一）―

原田憲雄

天の河　そらにかたぶき／人の世にすだれは垂れぬ／涼しくなりし枕べに　しとどの涙／うすごろも脱がむとし／ふと問ひぬ　夜やいくとき

翠（みどり）のとばりに蓮の実ちさく／金の屏風に蓮の葉まれに／かつての空とかつての衣／さあれ　おもひは似ざるかな／かつての時に

中国は宋代の女詞人李清照の「南歌子」という詞である。

「詞」は、歌謡のひとつのスタイル。広義の詩の一種だが、中国では「詩」とは区別し、「塡詞」「長短句」「詩余」などの別名がある。日本の小唄や端唄にあたり、唐代に生れ、はじめはもっぱら遊里でうたわれたが、知識人の間に試みる者があらわれ、五代には高級官僚、さては皇帝の中にも手がける者が出、宋代にはいると、遊里や音楽からも離れ、時代の代表的な文学となった。中国の「詩」は、恋愛をうたうことを避ける傾向がある。「詞」は恋愛をうたうのが本来で、そこには止まらず、ことに士大夫の作者が増えるにつれて「詩」の主題だったものも取り入れられるが、いわば例外。ただ、小唄、端唄の域を越えて上品になった。

「南歌子」は「詞調」の名、日本でいえば「追分」とか「木曽節」といった節の名。詞調によって、字数、句数、韻のふみ方などが異る。『詞譜』『詞律』などによってその大体を知ることができる。追いおい詳しい説明もすることになろうが、今はこれくらいにして李氏の「南歌子」にかえる。

天上星河転、人間簾幕垂。

七月七日、いわゆる七夕のよるのこと。天上では、星河、あまのがわが音もなく回転し、地上の人間世界では、女がひとり、部屋のすだれも掲げずに、閉じこもっている。李賀は「天上に破けし鏡も、人の世に鈎とこそ見め」とうたう。この夜はたれだって天を仰げばこそ片破れ月を玉のかぎかと見もしようものを、どうしたことか。「天上　人間　かならず相見む」とは、白居易の「長恨歌」。死がふたりの仲を引き裂いても必ず逢おうとする恋人どうしの誓いのことばだ。この詞も「天上」「人間」の語を対句として使うからには、李・白二氏の句を前提と

する。「女がひとり」といったのは続く句による。

涼生枕○涙痕滋。　　○は竹十譚一言　音はテン

○は「たかむしろ」、竹の表皮を細くさいて織ったむしろ。花の模様を織り出したものを「花○」といい、このもそれに違いない。添い臥せば、たかむしろも熱くなる。涼しといい、枕も涙のあとでぐっしょりといえば、女のひとりねにきまっている。許渾に「玉なす樹々に西風たちて枕べは秋、楚の雲や湘のかは共に遊びしひとぞこひしき」なる美しい句がある。

起解羅衣、聊問夜何其。

うすぎぬを解こうとして、ふとつぶやく「いま何時ごろかしら」

「うれたしや舞ごろもはつかに薄き、ややおぼゆ花むしろふするに冷やき」とは李賀の句、まして舞いもせぬ身のつめたさに、うすぎぬは耐えがたく、衣をかえようとして解くのであろう。そうしてふとつぶやいて、つぶやきの「いま何時かしら」に、同じことばをつぶやいたかつての夜が記憶によみがえる。そのときは、ひとりではなく、衣を解くのもつめたさのためではなかった。

氷のはだへ　玉の骨／涼しらに汗あえず／池殿は風さやぎほのかなる香り満つ／とばりかかげ／さやかなる月かげの　ひとうかがふに／ひといねず／枕にあてしくしゆがみ鬢ぞみだるる.

起きいでて手をとるに／庭のべに声なくて／星ひとつ天の川わたるを見しか／ふと問ひぬ　夜やいかに／夜のくだち／月あはく／星の座の低くかたぶく／西風はいつか来たると指おるに／流るる年のひそかにもうつ

りけらずや

「蘇東坡のこの洞仙歌はいまの僕たちをうたったような詞だね」と男がいった。

ここまでが前段で、垂・滋・其の三カ所に韻がふんである。詞は一段だけの短いものもあるが、前後両段からなるものが多い。さて、後段。

翠貼蓮蓬小、金銷△葉稀。　　△は艸＋耒＋偶一人　音はグウ

ひすい色のカーテンに縫いとりの蓮の実は小さく、金びょうぶに描かれた葉はかすれて消えそうだ。これを、女の衣服の模様と見る説がある。それなら翠は蓮の実の、金は葉の色であろう。

旧時天気旧時衣。

こよいの空の模様は、あのときとそっくりそのまま。そしていまつけた衣もあのときのもの。

祇有情懐、不似旧家時。

ただ、女のおもいは、かつての日に似ない。

もとより、似ないのは、かつての時を共にした人がいないからである。蓮は、憐すなわち恋と音が通じるので恋の隠語として用いられることが多い。「天気」と「衣」と、すなわち、天上も人間も「旧時」のままといいながら蓮の実が小さく蓮の葉がまれとなったことで、女の恋が破れたことを暗示する。

後段は、稀・衣・時の三字で押韻している。

この詞はすこしもむつかしくない。単純そうに見えるが、さりげなく古典が活用してあって、李清照の作品と

としては中くらいの出来であろうが、ことばに無駄がなく、しみじみとした情感がただよった佳作だ。

この詞を、一一二七年、清照四十四歳以後の作だとする説がある。この年、宋は異民族の国金の軍隊に都を占領され皇帝だった徽宗・欽宗がとりことして連れ去られ、高宗が即位した。清照の夫趙明誠は金陵で死んだ母の葬事に南下し、以後、清照もあとを追って南下するが、やがて夫とも死別し、乱離にさまよう。

詞の内容からいって、その時期にあてるのは理解しやすいが、詞は、それに先だって発生した楽府と同じように虚構を許す文体だから、断定はできない。李清照の詞は、厳密にいえば作時のわからぬものが多い。つまり否定するための積極的な根拠にも乏しい。だからここでも、先人に説があればおおむねは従っておくのである。

「詞」という文体の詩にぶつかったのは、一九四〇年ごろである。当時、大学で支那学を専攻していたが、講義で聞いた覚えはない。勝手に読みちらすもののなかから見つけたのだ。魅力的だが、はなはだ読みにくかった。読みにくいから一層ひきつけられたのかもしれぬ。一九四二年十二月、中田勇次郎訳註『詞選』が出た。入営中だったわたしは翌年の夏、森田曠平君を煩わして入手した。同書には李清照は「壺中天」「声々慢」「鳳凰台上憶吹簫」「醉花陰」の四首を収める。中田氏は一九四〇年に『宋代の詞』を出していて、いま手許にないので確められぬが、やはり同じ作を紹介していたように思う。詞について日本語で書かれた本は、わたしの手にしうるものはこれくらいしかなかった。

戦後、ぽつぽつ詞集や詞について書かれたものを集めた。図書館で写したものも何冊かになった。日本人のも

のでは目加田誠『風雅集』花崎貞『新訳・漱玉詞』などが印象深い。花崎氏は一九二四年日本女子大学卒業の女史、『漱玉詞』は李清照の詞集の名だ。

一九五六年七月刊行の拙著『幽歓集』に晏幾道「来生縁」（玉楼春）、温庭筠「こぞのかなしび」（更漏子）があり一九六四年の『蓼莪集』に李清照の「過雁」（声々慢）などがあるのは先進の作業に促がされてのことであった。当時としては、なおめずらしいもののうちに属したであろう。その後、中国でも日本でも詞の研究は飛躍的に進んだ。清照についても『李清照研究彙編』（一九七四年香港）『李清照集校註』（一九七九年北京）『李易安集繫年校箋』（一九八〇年台北）などのすぐれた作業が出版され、雑誌に掲げる研究にいたっては枚挙のいとまもない。前にある出版社から、李清照について一本をまとめるよう依頼をうけて、ぽつぽつ筆をとりはじめたが、身辺に事が多く、そのままになっていた。怠っていた『方向』を新しいかたちで出しはじめたしおに、ともかく書いてみようと思い立ったのが、この稿である。（一九八二年七月五日）

原田道子

すいか

いなかのうちに　すいかができました。
ちょっけい 15cm くらいで、少し小さかった。
わたしが、すいかの絵をかいて、書きながら、もう、一どみたら、はじけていました。

お父さんに言ったら、どうもないようなかおをしはりました。
お母さんに言ったら、出てきて、すいかをきりました。お父さんは、よる、そのすいかをたべたとき、「みち子が、すいかがわれている、って言ったのは、じょうだんやとおもったけど、ほんとやったんやなあ。」といっていました。あまくて、水けがたっぷりしていて、あまいにおいがしました。
お母さんは、「じゅくしすぎて、われたんだね。」と言っていました。このすいかは、春たべたすいかのたねをうめたところからでました。「よくめがでたなあ。」とおもいました。
（一九七九年八月二十五日）

ふしぎな自転車

原田道子

わたしは、ステキな自転車をもっています。ピアノ教室へ行くのも、図書館へ行くのもいっしょです。
ある日、わたしは、いつもまちがえたことのないピアノの帰り道をまちがえてしまったのです。
とてもきれいなにじを帰る反対の方向に見たのです。それでつい自転車にのったまま、ふらふらとにじの方へきてしまったのです。こまったけれど、人にたずねて、いきあたりばったりできてしまったのです。
だんだん夜が近づいてきたのに、まだ帰れません。
「オカシイナー」
と、泣きそうなのをかくすために言ったけれど、だれも聞いている人はいませんでした。とうとうナミダがおち

そうになりました。

そのとたん、わたしの愛車「レモン」がとびあがったのです。

あわてて、ペダルをふむと、まっすぐにすすみました。

びっくりして、ブレーキをふんだら、その場でとまりました。下を見ると、真下に家が！　わたしの家が！

おおよろこびで、下りました。

それから、毎日、「レモン」をみがきました。それから、のったりもしました。けれど、このまえのようなことは、一回もおこりませんでした。

（一九八二年三月）

前号正誤

二二頁一三行　早島鏡生↓早島鏡正

なお、二三頁二行にへわたしの文中「仏典の始終」というのは記憶の誤りかもしれぬ。〉と書いたが、月輪賢隆『仏典の批判的研究』（昭和四六年京都）に収める同論文名は「仏典之始終」だった。

後記

第一九号につき、これくらいの頁数のものが読みやすくていい、という意味の感想を示された読者がおられ、わたしも、ほっとした。編集する方も、これくらいの方が出しやすい。いくらか機械化はしたが、やはり素人の手作り、用紙も粗末だが、『方向』にはそこらが分だろうと思っています。　一九八二年七月二十四日　憲雄